



鐵齋 秋季展

会期

10月10日(火) ~ 12月14日(木)

月曜日休館

文人画家・富岡鉄斎

鉄斎は通常、近代日本美術史上の掉尾を飾る文人画家の巨匠といわれている。文人画とは読んで字の如く、本来は文人が嗜む絵画のことであり、その起源は文献上では遠く中国の唐時代にまでさかのぼり得る。風習としては多分、教養人士の精神生活が社会的に認知を得た頃より前、つまり六朝の頃から存在していたと想像するのが自然である。したがってもともとは絵画様式ではなく、人間の生き方にかかわる事どもを表出する手段として社会生活とともに創生されたものであり、主として学者、詩人、あるいは官人でさえ、その人の精神的な高揚や陶冶などの内容、あるいは人生観などを絵に託すというのが本来のあり方であった。その後、こうした認識は中国絵画の一つの重大な支柱となってやがては明・清の時代には全盛期を迎え、わが国にもたらされたわけであるが、その間の彼我の事情は若干異なり、中国が諸々の絵画論によって鍛えられ撓められ、時には深く難解な哲学を擁することもあったのに対し、我国のそれは一部を除いてや、スタイルに偏重したのには、勿論中国の長い歴史が語るところ



15 写懐詩書

の多くの理論を短時日の間に受容しなればならなかった我々の側の条件もさることながら、わが国にはわが国としてすでに認められ、存在理由を有していた伝統的な絵画様式を持っていた、というところに答を求めることができるだろう。一般的にいつて中国と日本の、およそ芸術作品に対するアプローチについては、精神的にも素材的にもその特徴的な差異を幾つか挙げることができようが、いまはそれに深く触れることは不可能なので、大体のところを概括的に述べれば、中国が想観的なものに対して、日本はどうしても情緒的であり、表現形態にしても彼が構造的なものに対して、我は平面的であるといえるだろう。それは文人画においても然りであって、最大公約数的にいつてみてもこのような様式的なわけ方もほぼ成立すると思われる。こうした最大公約数のうち最も普遍的な主義—それは現世の諸々の事象から離れ、世俗を脱して理想的な自然に没入する、その境地を絵筆によって表現するという考え方—それを「胸中の丘壑を描く」などというが、こうした標榜は必然的に風景画のジャンルに偏るという結果を生み、したがって文人画の主流というものが、山水を描く一つの流派とも受取られ勝ちなもの、結果としては一つの成行きでもあった。しかしこの成行きが、時として似て非なる、いいかえれば形骸化への傾きとなる危険をはらんでいたこと、そして事実そうした道を歩み現在では顧みられなくなった作品の多くを生んでしまったことは、わざわざ例示するまでもないことであろう。

こうした中であって鉄斎が、勿論この伝統的な精神や方法を受け継ぎながら凡庸に墮さなかったのは何故か、鉄斎が鉄斎であった理由をあとづけることこ



3 山中訪友図

そ、その謎を解く鍵であるといえる。そこでまず、鉄斎自身の言葉として有名な「南画論」からその冒頭の部分を引用してこの事を考えてみたい。

文人南宗画、其ノ起原ハ学士大夫隠者寄興シ清娛シテ性情ヲ淘汰スル遊戯ナリ。其ノ学士大夫、何レモ其ノ志卓乎トシ、識慮弘遠ノ人ニ而キ、普通凡俗ノ人ノ決シテ及ブ所ニ非ズ、其ノ学士大夫隠者寄興ノ外、或イハ時世ニ背違シ、自己ノ志ヲ馳驅スルヲ得ズ、蹶然跡ヲ避ケテ農樵ト隠レ、其ノ胸中ノ逸気ヲ写出ナレバ、其ノ書画ニ巧妙有ルハ無論也。此ノ志ヲ定メテ而ル後ニ緒余ノ芸ニ従事スベシ。然ラバ其ノ志ス所異ルモ、一定不動ノ念慮無カラベカラズ。夫レハ農ニ安ンジ漁ニ安ンジ、外ニ願望無ク一定ノ心志ヲ養イ、利害得失ニ泰然タルベシ。其ノ人必ズ博学多識ナリ。此ノ博学多識ハ天地造物ノ理ヲ悟リ、我が筆端ニ露出スル具ナレバ、其ノ志ヲ高クシテ此ノ芸ニ始メヨリ糊口銜世ノ意ハ無カルベシ。

(後略)

いうまでもなく、鉄斎はこの場で南画の根本理念を語っている。ここでまず、絵画を描くということの目的とともに、描く人の資格を問うているのだ。重なるようだがそれは「普通凡俗の人の決して及ぶところでなく」、そして、「外に願望がなく、利害得失に泰然たるべし」という語に明らかである。つまりは画家の資質そのものを規定しているのであり、生き方自体を指し示しているともいえる。更に「其の人必ズ博学多識」という。その博学多識に裏づけられてこそ「天地造物の理を悟ることができ」、そこで始めてこれを手段として筆にあらわすことができるのだ、とも主張する。鉄斎が実生活において俗事に関らず、利害得失に疎かったことはすでによく知られているところであり、その意味では鉄斎はまことに言行一致の典型であった、といえるだろう。博学多識はどうか。これはもう古今を通じて多分鉄斎の右に出るものは稀有であろうと思われる程の読書量をこなし、しかも日本全国に自ら狩猟をつくして知見を広めた事実によっても保証される。およそ文人画家たるものは「万巻の書を読み、万里の道を往く」ことが古来の条件とされているのは周知であろうが、鉄斎の博学は四書五経から始まり、古今の史書・哲学書・文学書、それも中国・日本を問わぬ膨大さに及び、足跡また幾多の史跡名所の調査や名勝の彫しい写生によって今日に伝えられている。それらの知識及び経



27 嵐山秋楓図



51 山陽逸事図

験がほとんど自家に蓄えられてこそ、鉄斎の作品が結実したといえるわけで、したがって必然的に時間の経過は、鉄斎の場合、作品の多様性とわかり難い関係にあるといえよう。展示から例を挙げれば、「老子出関・淵明遊興図」(No.24)、「輞川雪

景図」(No.59)、「東坡笠屐図」(No.68)などは中国の、「赤穂義士像」(No.22)、「山陽逸事図」(No.51)などは日本の史実や故事に基いたものであり、「妹勢山真景図」(No.19)や「嵐山秋楓図」(No.27)、「牛祭図」(No.30)などは日本の風景・風俗である。こうした典拠あるいは真実を伝える風物等はその他枚挙にいとまがなく、鉄斎作品の大部分を成している。しかもなお最終的には胸中の逸気を写出し高潔な理想をめざし、そして自然と一体となるという文人画家本来の境地にも到達するのである。鉄斎の晩年における数々の仙境図（本展ではNo.78の「蓬莱仙境図」、No.80の「瀛洲倦境図」）が示す境地こそ鉄斎の本質である、というのも夙に識者の示唆するところである。

このような主題・内容を実際に画面に定着させるについてはまた、鉄斎は独自の方法を選んだ、ということも重要な問題である。すなわち鉄斎は、表現手段として従来の文人画のみによらず、多くのさまざまな先行作品からその技術を学んだ。鉄斎の作品を年代順にみていくと、いかに多様な作品をこれ又数多く観ていたか、そしてそれらのうちから主義主張にとらわれることなく吸収に努めていたかがよくわかる。さきの「南画論」中にも先人の技術を取り入れるべく、山水、花鳥、人物にわた



78 蓬莱仙境図

ってそれぞれ論じているのを見るが（繁を避けるために引用はしないが）、やはりその端緒から解き明かし、先人の説も容れ、微細にわたってその留意すべきところを挙げている。作品としてはそれらは大津絵であったり（No.4「擬大津絵小帖」）、大和絵であったり、時には写生風であったりして、とても既成の概念的な南画風山水画などとは縁遠いものである。その他「補陀落迦山図」(No.66)、「普陀落山観世音菩薩像」(No.70)、「巖栖十八羅漢困碁図」(No.75)にみるように、仏教思想に対しても、啓示を求めてやまなかったことが想像される。

今回の展示では以上のような鉄斎の芸術がめざしたものを、比較的前期の作品から中期の画道確立、そして独自の境地を開拓する後、晩期に至るまで、その展開に沿って展覧するものである。豊富な主題と多様な技巧もまた年令を追って目のあたりにすることができる。そうした中で独自の墨色の変化の妙や、大胆な色彩の配置、巧まらずして成った自由な構図も看取できるだろう。それらを鉄斎は、常に内容あるものとし、意味をこめて描き続けて90才に至ったのである。したがって文人画誕生の頃の文人の生き方を、生涯を通じてまげることなく十二分に発揮したその妥協のない正統性が、鉄斎をして最後の文人画家と称せられる所以となっているのである。

(村越英明)



68 東坡笠屐図

《出品目錄》

番号	題名	制作年代	年令	本紙寸法	材質・彩色	形状
1	名勝十二月図	1866 (慶応2)	31	133.0×63.0	紙本淡彩	掛軸
2	蕪蒲図 蓮月尼歌賛	1867 (慶応3)	32	115.5×30.7	紙本淡彩	掛軸
3	山中訪友図	1868 (慶応4)	33	133.4×30.0	紙本淡彩	掛軸
4	擬大津絵小帖	1869 (明治2)	34	(各) 17.7×14.6	絹本着色	画面帖
5	漁父図	1869 (明治2)	34	104.2×25.5	絹本淡彩	掛軸
6	松図 蓮月尼歌賛	1869 (明治2)	34	135.4×19.5	紙本墨画	掛軸
7	蜀山晚霽図	1870 (明治3)	35	118.0×40.2	絹本淡彩	掛軸
8	蓮月・鉄斎合作扇面画帖	1870 (明治3)	35	(各) 18.0×51.0	紙本着色	扇面画帖
9	壳飴翁図	1871 (明治4)	36	131.8×29.8	紙本淡彩	掛軸
10	秋山深趣図	1871 (明治4)	36	157.0×49.0	統本墨画	掛軸
11	壳柑者図	1872 (明治5)	37	148.5×49.5	統本淡彩	掛軸
12	溪山真楽図	1874 (明治7)	39	178.3×60.0	紙本淡彩	掛軸
13	秋草図 蓮月尼歌賛	不詳	30代	33.0×49.0	紙本着色	掛軸
14	四季山水図	不詳	30代	(各) 31.4×42.3	紙本淡彩	掛軸
15	写懐詩書	不詳	30代	137.5×29.2	紙本墨書	掛軸
16	竹窓聴雨図	1875 (明治8)	40	171.5×66.4	統本墨画	掛軸
17	溪山真楽図	1875 (明治8)	40	147.9×79.0	紙本淡彩	掛軸
18	漁楽図	1876 (明治9)	41	133.3×58.4	紙本淡彩	掛軸
19	妹勢山真景図	1879 (明治12)	44	122.3×33.2	統本淡彩	掛軸
20	漁父打網図	1880 (明治13)	45	134.0×51.3	絹本着色	掛軸
21	竹溪観瀑図	1882 (明治15)	47	130.7×48.0	紙本淡彩	掛軸
22	赤穂義士像	1883 (明治16)	48	(各) 139.4×31.8	紙本淡彩	八曲屏風一双
23	蔬菜図	不詳	40代	(各) 25.1×50.4	絹本淡彩	小襖
24	老子出関・淵明遊興図	不詳	40代	(各) 137.8×63.9	紙本淡彩	掛軸
25	青山帰隠図	不詳	40代	155.7×40.9	統本淡彩	掛軸
26	和氣清麻呂公詩二行書	不詳	40代	134.2×32.4	紙本墨書	掛軸
27	嵐山秋楓図	1886 (明治19)	51	161.8×57.0	絹本着色	掛軸
28	溪山真楽図	1889 (明治22)	54	158.8×65.3	統本淡彩	掛軸
29	北野大茶湯図 卷	1890 (明治23)	55	33.1×575.3	絹本着色	卷子
30	牛祭図	不詳	50代	133.3×31.4	紙本淡彩	掛軸
31	蒲生君平図	不詳	50代	142.0×50.2	絹本着色	掛軸
32	三聖図	不詳	50代	129.4×41.5	絹本着色	掛軸
33	寿老人観月図	不詳	50代	130.8×33.1	紙本淡彩	掛軸
34	仁者楽山図	不詳	50代	159.0×61.0	紙本淡彩	掛軸
35	陶淵明像	不詳	50代	128.1×52.0	紙本淡彩	掛軸
36	菅公水中月詩書	不詳	50代	133.4×43.8	紙本墨書	掛軸
37	不如学書	不詳	50代	33.8×106.5	紙本墨書	額装
38	景德鎮陶窯図 卷	1896 (明治29)	61	16.9×637.0 16.9×346.0	紙本着色	卷子
39	天宇受売命・猿田毘古命図	不詳	60代	(各) 120.2×28.8	紙本淡彩	掛軸
40	薬神少彦名命図 書聯添	不詳	60代	(各) 108.6×28.5	紙本淡彩・墨書	掛軸
41	山水貼交屏風	不詳	60代	(各) 131.0×51.4	絹本着色	六曲屏風一双
42	蓮華図	不詳	60代	16.1×51.8	紙本淡彩	扇面額装
43	百事如意図	不詳	60代	42.0×97.6	絹本着色	額装
44	鉄老談芸 卷	不詳	60代	23.5×138.5	紙本墨書	卷子
45	豪溪真景図	1907 (明治40)	72	154.0×30.6	紙本淡彩	掛軸
46	寿山福海・神仙採薬図	1907 (明治40)	72	(各) 128.4×40.7	絹本着色	掛軸

番号	題名	制作年代	年令	本紙寸法	材質・彩色	形状
47	大悲観世音図	1910 (明治43)	75	133.0×32.6	紙本墨画	掛軸
48	長椿古石図	1912 (大正1)	77	133.0×60.0	紙本墨画	掛軸
49	山居夜雨図	不詳	70代	径40.1	紙本淡彩	掛軸
50	巖棲谷飲図	不詳	70代	35.0×340.3	絹本着色	巻子
51	山陽逸事図	不詳	70代	18.4×49.5	紙本着色	扇子
52	落花遊魚図	不詳	70代	134.6×46.5	紙本淡彩	掛軸
53	竹石図	1915 (大正4)	80	16.5×51.4	紙本墨画	扇子
54	安心立命詩書	1916 (大正5)	81	126.1×43.4	絹本墨書	掛軸
55	献珠成佛図	1917 (大正6)	82	73.3×67.2	絹本着色	額装
56	呂僊修道図	1917 (大正6)	82	141.8×42.4	絹本着色	掛軸
57	山高水長図	1918 (大正7)	83	142.6×51.3	絹本着色	掛軸
58	伏魔大帝関雲長像	1919 (大正8)	84	155.7×46.6	紙本着色	掛軸
59	網川雪景図	1919 (大正8)	84	133.6×64.4	紙本淡彩	掛軸
60	大国主大神像	1919 (大正8)	84	129.0×32.0	紙本墨画	掛軸
61	福祿寿図	1920 (大正9)	85	131.5×63.8	紙本着色	掛軸
62	嬾残喫芋図	1920 (大正9)	85	130.8×32.1	紙本淡彩	掛軸
63	山居静適図	1920 (大正9)	85	113.6×47.6	紙本墨画	掛軸
64	東山秋霽図	1920 (大正9)	85	16.5×52.6	紙本着色	扇子
65	甌北清夏図	1921 (大正10)	86	(各) 17.5×53.5	紙本着色・墨書	扇子
66	捕陀落迦山図	1921 (大正10)	86	146.1×40.6	紙本着色	掛軸
67	利市三倍図	1922 (大正11)	87	134.0×32.5	紙本淡彩	掛軸
68	東坡笠屐図	1922 (大正11)	87	133.0×31.9	紙本着色	掛軸
69	小化城図	1922 (大正11)	87	17.8×55.0	紙本墨画	扇面掛軸
70	普陀落山観世音菩薩像	1923 (大正12)	88	130.8×65.3	紙本淡彩	掛軸
71	山水・蔬菜図	1923 (大正12)	88	(各) 16.4×49.8	紙本淡彩	扇子
72	宮比福御影	1923 (大正12)	88	128.5×32.2	紙本淡彩	掛軸
73	印癖	1923 (大正12)	88	31.1×132.4	紙本墨書	巻子
74	福内鬼外図	1924 (大正13)	89	131.9×32.9	紙本淡彩	掛軸
75	巖栖十八羅漢囲碁図	1924 (大正13)	89	144.6×39.2	紙本淡彩	掛軸
76	春光鹿書	1924 (大正13)	89	31.8×108.0	紙本墨書	額装
77	君子清遊図	1924 (大正13)	89(90)	144.5×40.5	紙本淡彩	掛軸
78	蓬萊仙境図	1924 (大正13)	89(90)	143.5×39.0	紙本着色	掛軸
79	天間独立禅師肖像	1924 (大正13)	89(90)	137.2×53.5	紙本着色	掛軸
80	瀛洲僊境図	1924 (大正13)	89(90)	142.6×40.2	紙本着色	掛軸

出品作品は期間中下記の通り三回にかけて展示いたします。
但し一部作品は重複することがあります。

- 第一回 10月10日(火)～10月29日(日)
第二回 10月31日(火)～11月19日(日)
第三回 11月21日(火)～12月14日(木)

12月15日(金)から翌1月14日(日)まで休館いたします。

鉄斎美術館 〒665 宝塚市清荒神清澄寺山内 電話 宝塚(0797)84-9600

平成1年10月2日 印施